



東高だより 一はなみずき

第6号
(H23.5.20)

「ゴッドハンド」

「グリーンサム (green thumb)」といえば野菜づくりがうまいということ。むかしは「緑の親指」がたくさんいた。田舎ではたいていこの家でも自分たちの食べる野菜くらいは作っていた。

今、都会では郊外に少しばかり田畑を賃貸してもらって、そこで無農薬で野菜を作るのがブームと聞く。賃貸料には、野菜づくりの指南料も含まれているというから、至れり尽くせりである。まあ、農家も後継ぎが見つからず、休耕にして草ぼうぼうにするくらいなら、都会の人に貸して田畑を荒らさない方が賢明な策というもの。ごもつともでござる。

借りた田畑で家族揃って野菜とか米を作る。子供たちにとってはいい経験になる。果物野菜には旬というものがある。なのに今は農業もバイオが進み、さらに輸入物が多いため、果物とか野菜には旬がなくなってしまった。日本というのは四季の国で、国民は四季を生活の軸としてきたから、これは随分とさびしい。借りた田畑でもなんでもいい、もし子供たちが果物とか野菜づくりを通して季節感を失わないでくれれば、少しは不安も和らぐ。

あれはイタリアのエミリア街道を旅しているときだった。私の旅はいつものことながら勝手気ままな旅で、予定というものがない。気の向くままふらっと汽車に乗り、「次の街になにかありそうだ」と野生の嗅覚が働くと、迷わず降りてしまう。地図もない、時間も気にしない、まったくのいきあたりばつりの旅である。

そんなこんなで、そのときも嗅覚に導かれるままその街に降り立った。そこは古い中世の街並みが残っており、近代文明から切り取られた古色蒼然とした雰囲気が気に入ってしまった。嗅覚がものの見事に当たったというわけである。異次元に身を忍び込ませてしばらくすると、どこからともなくハンマーの音が聞こえてきた。またしても嗅覚が働く。あっちに行け。分かった。そうするよ。パン屋の前を通り過ぎ四つ角のところにやって来た。靴裏に伝わってくる石畳の凹凸の感触が、やけに馴染んでいる。何十年もそこを歩いていたようだ。足元に堆積した時間の温もりに、くるぶしからせり上がってくる疲労を忘れる。それに向かいのカフェでコーヒーカップを傾ける金髪美人と目が合ったこともいい予感を抱かせた。アモーレ！

ハンマーの音が空想の殻を破って耳底に落ちた。はっと我に返り金髪美女に別れのウインクをすると、その音のする方へと歩いて行った。

肌着姿の男が金床の上で金属板を叩いていた。頭は胡麻塩、額には職人ならではのやや気むずかしい深い皺が刻み込まれている。ハンマーを振り上げるたび、赤銅色の肩の筋肉が盛り上がる。男が作っているのはヤカンだった。

私がじっと見ていると、男は仕事の手を休め、こっちにこっちに来いと手招きした。遠慮せず仕事場に入った。鉄の匂いがした。東洋人が珍しかったのか、男は先ほど見せていた気むずかしさをはぎ取り愛想良く話し掛けてきた。ちょうど一息入れるところだったと言ひ、私にもコーヒーをくれた。

壁にはヤカンだけでなく鍋とか水差しとか、いろんな日用品がぶら下がっていた。私が好奇の目でそれらを見ていたら、男が説明を始めた。イタリア語はほんのあいさつ程度と言うと、流暢な英語で話してくれた。男は高校を卒業すると、本当は大学に進学し工業関係の勉強をしたかったが、大学に行く金がないということで、父親の後を継いだ。それが鉄板で日用品を作ることだった。父親に弟子入りして50年の歳月が流れた。

男は作りかけのヤカンをホイと差し出してきた。ずっしり重いヤカンでこれとって装飾もない。ヤカンを作ってメシが食えるなんて、さすがイタリアだ、と内心苦笑したほどだ。ところが、男の次の一言に私は驚いた。なんだって！ 私はヤカンをくるくると回し鉄板の継ぎ目を探した。しかし、あるはずの継ぎ目がない。男は一枚の鉄板を「打ち出し」という特殊な工法でヤカンを作っていたのだ。「傍目には単純そうに見えるけど熟練の技が必要で、我が家の伝統さ」と男はちょっと自慢げに言った。別れ際に男と握手をした。ごつごつとしていると思いきや、柔らかな手だった。この手があの優れものを生み出すのか。これぞゴッドハンド。後継ぎは？ 余計なことを訊いたかもしれない。それに対し、男は軽く顎をしゃくった。作業場の隅で若い男が鉄板と格闘していた。「息子がね……」

スイカ、イチゴに旬がなくなる日本。伝統技術の継承者がいない日本。これってまずくないかい。あの男はまだ鉄板の打ち出しをやっているのだろうか。あれからもうかれこれ15年になる。多分、息子が男の技術をしっかり受け継いでいるに違いない。うらやましい。

